アンドレ・マルロー綜合年譜（II）

堀　田　郷　弘

は　じ　め　に

本稿は同紀要第一巻 第一号（1977年3月）に発表した「アンドレ・マルロー綜合年譜（I）」に続くものである。年譜（I）では，マルロー生誕の1901年から1920年まで編述したが，今回の（II）では，訂正を含めての1920年から1922年までをとり扱う。

資料とした文献については，（I）の序文に掲げておいたが，その後約一年間に貴重な文献がさらに発表された。それらのうち主なものを参考文献追加の意味で，次に掲げておく。

Clara Malraux『La Fin et le Commencement』(Grasset, 1976), Claire Goll『La Poursuite du vent』(Olivier Orban, 1976), Emmanuel Berl『Interrogatoire』(Gallimard, 1976), Brigitte Friang『Uu autre Malraux』(Plon, 1977), Maria Van Rysselberghe『Les Cahiers de la Petite Dame』—Cahiers André Gide 4 と 5 (Gallimard, 1973, 1974), 『Malraux, Etre et Dire』(Plon, 1976), André Malraux『L'Homme précaire et la littérature』(Gallimard, 1977), その他マルロー特集の雑誌「Sud」, No. 21 (1977, 1), 「N. R. F.」No. 295 (1977, 7)。

年　　譜

年譜の左欄はマルローの生活を，中央欄はマルローの著作とマルローについての文献を，右欄は関連する歴史的事項を示す．中央欄においては，マルロー著（ないし共著）の単行本は全て太字イタリックで，誌紙に発表の著作は普通のイタリックで，またマルローについての著作は全て，行頭をさげ，活字を小さくした．その他全体を通じて，単行本は『　』，誌紙は「　」で示し，（　）内は単行本の場合は出版社名，誌紙発表の場合は誌紙名と発行月日を記した．表中の①②…は脚註，(1)(2)…は文末の補註を示す．註の場合の文末の（　）は出典を示した．→邦訳は邦訳のあることを示す．

1920（大正9年）

ドワイヨン書店の仕事を続ける。1月創刊の「ラ・コネサンス」誌②（1920.1～1922.11）の編集や稀覯本発掘および出版の仕事。J. Laforgue『Chroniques Parisiennes』2巻(1), A.-C. Emmerich『La Passion de Jésus-Christ』, Görres『La Mystique divine, naturelle et diabolique』の出版を企画。

シモン・クラ書店(2)に移り，少部豪華版の＜サジテール叢書＞出版企画を担当，L. Tailhade『Carnet intime』, Baudelaire『Causeries』, G. Gabory『Cœurs à prendre』, R. de Gourmont『Le Livret de l'Ymagier』, M. Jacob『Jouets du Vent』(3) など出版。

この頃より文筆活動をはじめる。編集担当の「ラ・コネサンス」誌や知己をえたジャコブやアルランらの

1月 *Des Origines de la poésie cubiste*①（「La Connaissance」1, p. 38-43）

2月 *Trois livres de Laurent Tailhade*③（「La Connaissance」2, p. 196-7）

2月・J. Valmy-Baysse「Il ne faut pas l'oublier」④（「Comœdia」. 2. 20）

J. Valmy-Baysse「Mise au point」⑤（「Comœdia」2. 26）

4月 *La Genèse des Chants de Maldoror*⑥（「Action」3, p. 33-5）→邦訳

7月 *Mobilités*⑦（「Action」4, p. 13-14）

7-8月・P. E.「Critique sur un conte fantastique de jeune Malraux」⑧（「Littérature」15, p. 24）

10月 *Prologue*⑨（「Action」5, p. 18-20）

*Les champs magnétiques par André Breton et Philippe Soupault*⑩（「Action」5, p. 69）

*La Négresse du Sacré-Cœur par André Salmon*⑪（「Action」5, p. 69-70）

1月・国際連盟成立．クレマンソー大統領選に敗れ，隠退．

2月・独ナチス綱領発表．仏鉄道員ゼネスト．

6月・高畠素之の『資本論』全訳完成．

7～8月・モスクワにてコミンテルン第2回大会．ガンジー不服従運動はじめる．中国広東政府樹立，孫文大総統に就任．

12月・仏社会党トゥール大会で分裂多数派共産党を組織．

---

① 評論「立体派詩の起源について」．アポリネールにはじまるジャコブやサルモンらの立体派の詩をP. Reverdy や F. Motorel の作品を引用しつつ論評．

② 1920年1月～1922年11月にドワイヨン書店から刊行され，Revue de Lettres et d'Idées と性格づけられる月刊誌．編集責任者は René-Louis Doyon と Edouard Willermoz.

③ 書評「ローラン・タイヤードの三冊の本」．『*Petit Bréviaire da la Gourmandise*』,『*La Douleur*』,『*Le Vrai Mystère de la Passion*』,『*Lettres familières*』の四作品をとりあげ Tailhade を論評．

④「*Des Origines de la poésie cubiste*」についての非難の批評．Comœdia は演劇日刊紙．

⑤「*Trois livres de Laurent Tailhade*」についての非難の批評．

⑥ 評論「マルドロールの歌の生成」．ロートレアモンの『マルドロールの歌』の論評．

⑦ 散文詩「可動なものたち」．

⑧ 署名の P. E. は Paul Eluard か．「*Mobilités*」についての批評．

⑨ 散文詩「プロローグ」．後の著書『*Lunes en papier*』の冒頭部の初稿の一部．

⑩ 書評「アンドレ・ブルトン，フィリップ・スーポー共著『磁場』」．

⑪ 書評「アンドレ・サルモン著『サクレクールの黒人女』」（散文詩）．＜Ouvrages reçus＞欄の一文で，署名はA. M.

「アクション」① 誌などに文芸評論や散文詩を発表。

編集や文筆活動を通じて，サルモン，パスカル・ピア，R. ラトゥシュ，G. ガボリー，F. フルーレ，またユダヤ画商カーンワイラーやその画家 J. グリス，ブラック，シャガール，レジェらを知る(4)。

ダダの集会にも出入(5)。

ブルトン，スーポー『磁場』，ヴァレリー『海辺の墓地』

国立民衆劇場TNP創立.

チャップリンの映画「キッド」.

M. ウェーバー，モジリアニ没.

1921

クラ書店における編集，出版活動続ける。<サジテール叢書>で P. Reverdy『Etoiles peintes』, Alfred Jarry『Gestes, suivis des Paralipomènes d'Ubu』, M. Jacob『Dos d'Arlequin』, Jean de Tinan『Annontation sentimentale』, R. de Gourmont『La Patience de Grisélidis』など出版。その他P. ピアと国立図書館の"地獄文庫"で発掘した Sade『Les Amis du Crime』,『Le

1－2月・Jean de Gourmont「Chroniques Parisiennes, etc. de Jules Laforgue」②（「Mercure de France」p. 168）

3月・ソ連クロンシュタットの反乱<ネップ>はじまる.

4月 ***Lunes en papier***③ (Eds. Galerie Simon)→邦訳

5月・F. Fels「Notes sur des éditions de Jarry et de Gourmont par Malraux」④（「Action」7.）

5月・独の賠償額決定.

---

① Action 誌は "Cahier individualiste de philosophie et d'art" と性格づけられ，Florent Fels と Marcel Sauvage が編集して，1920年2月から1922年にかけて発行された前衛誌．発行所はパリの 18, rue Feydeau.

② マルローの企画により Doyon 書店から刊行されたラフォルグの『パリ時評』2巻などについての好意的な紹介.

③『紙の月』，副題 *Petit livre où l'on trouve la relation de quelques luttes peu connues des hommes ainsi que celle d'un voyage parmi des objets familiers mais étranges.*「人間同志のほとんど知られていないいくつかの闘いと，同じく身近かではあるが奇妙な事実をめぐる旅の物語が見出される小冊子」．大きさ 321×231，全40頁，F. レジェの版画7点を含み，M. ジャコブに捧げられ，著者自身 prose「散文詩」と内容定義し，プロローグ，I・戦闘，II・旅，III・勝利，という章構成になっている小著．100部限定出版，1926年に絶版.

④ Action 誌の編集長による，マルロー企画の Doyon 書店刊行のジャリ『ユヴュ王行録，史略』とグールモン『グリゼリデイス夫人の忍耐』についての批評.

B...de Venise』, Louis de Gonzague Frick『Galamiste alizé』, L.Tailhade『Poésies érotiques』などを秘密に出版，また Claude d'Esternod『L'Espadon satyrique』[6] の出版企画する。

散文詩とも言うべき初の著書『*Lunes en papier*』を知り合いの Galerie Simon 社より100部限定で出版，反響は平凡であった。この頃主にファンタチィックな散文詩の小品を前衛誌に発表しているが，それらを集めた『*Ecrit pour une Idole à trompe*』をロネオ謄写印刷で自費出版したと云われる[7]。またこの頃から本格的なマルローが示されるエッセー『*La Tentation de l'Occident*』の執筆をはじめる[8]。

文筆あるいは出版活動を通じて交遊がさらに拡がり，J.ポーラン，モラン，J.コクトー，R.ラディゲ P.ルヴェルディ，B.サンドラら，あるいはゴル夫妻，そしてこの夫妻の日曜午後の会を通じて，グレーズ

	7月・上海にて中国共産党創立大会
8月 *Journal d'un Pompier du Jeu de Massacre*① (「Action」8, p. 16-8)	
*Les Hérissons apprivoisés*② (「Signaux de France et de Belgique」4, p. 171-7)	
10月 *André Salmon : L'Entrepreneur d'Illuminations*③ (「Action」9, p. 37)	
	11月・ムッソリーニ，伊ファシスタ党結成. ワシントン軍縮会議はじまる.
	12月・マルセイユで仏共産党創立大会. 日英同盟廃棄.

① 散文詩，「人形倒し遊びの消防夫の日記」，副題 *Où vont les chats qu'on voit la nuit*? とつけられ，「断片」fragment と記されている. A. Vandegans 氏によれば，*Ecrit pour une Idole à trompe* と題名づけられる作品の一部とされる (「Un fragment négligé d'Ecrit pour une Idole à trompe」—RLM No. 304—309, 1972. 4, André Malraux 1).

② 日記体の散文詩，「飼い馴されたはりねずみ」，総合題名は *Les Hérissons apprivoisés—Journal d'un Pompier du Jeu de Massacre—publié après la mort de l'Auteur, avec des Notes, par le sieur des Etourneaux*. Vandgans 氏によれば *Ecrit pour une Idole à trompe* と題名づけられる作品の一部とされる.「Signaux」誌はベルギーのアンヴェルの L. Opdebeex 社から刊行された文芸月刊誌.

③ 書評「アンドレ・サルモン著<照明請負人>」. <Ouvrages reçus> 欄で N. R. F. 刊の当書を紹介している.

C.アルノー，P.デルメらとも知り合う。とりわけ6月頃富裕なユダヤ人文学少女クララ・ゴールドシュミットに出会う[9]。8月2人だけのイタリヤ旅行中に婚約，10月26日結婚。新居はクララの家族の住むパリ16区のシャレ大通10番地の家に同居。すぐ新婚旅行をかねて，プラハ，ウイーンを経てクララの生地メグデブルグに向う。当地でクララの親族に会う。

A.フランス，ノーベル文学賞受賞.

ジッド『一粒の麦もし死なずば』. ジャコブ『中央実験室』. 魯迅『阿Q正伝』

クロポトキン没.

1922

クララの生地メグデブルグからベルリンへ向う，当時流行していた表現主義の芸術に興味を示す[10]。

帰仏後はシャレ大通のクララの家に住み，文学青年的新婚生活を送る。当時の交遊範囲は，画商カーンワイラーやシャガール夫妻，グリスガラニスら画家たち，またジャコブ

2月・G.Gabory「Lunes en papier, par Malraux; avec des des gravures sur bois de Fernand Léger」①（「N.R.F.」101, p.228）

3月 *La peinture de Galanis*②（「Catalogue de l'Exposition de D.Galanis」, Galerie de la Licorne, 3. 3～18）

*Aspects d'André Gide*③（「Action」3-4, p.17-21）

4月 *Lapins pneumatiques dans un jardin français*④（「Dés」1, p.16-20）

1月・ポワンカレ内閣成立.

2月・エヂプト独立. 中国に対する九ケ国条約.

3月・中国に対する日本の<21ケ条要求>撤回.

---

① 『紙の月』についての友人ガボリーの13行の短い書評.「マルローは極めて純粋なことば使いでこの作品を書こうと心を配った. レジェの木版画はこの書に風変りな趣きの挿絵を与えている」

② 美術批評「ガラニスの絵画」. 3月3日から18日までパリのラ・ボエシー街10番地のリコルヌ画廊で開かれたガラニスの個展のカタログに執筆したもの，後1931年刊の『現代芸術家伝記事典』に収録される. ギリシャ出身の画家の資質にふれ，諸文明の芸術を比較することの有意義なことを述べている.

③ 評論「アンドレ・ジッドの諸相」. ジッド理解の方法論を主に論じたもの.「ジッドには相反する影響が作品を成立させているが，一般に，芸術的個性は，その理念を見るべきではなく，作者が自からに課している原理を見るべきである」.

④ 散文詩「あるフランス庭園の風船仕掛けの兎たち」. 自費出版の『*Ecrit pour Une Idole à trompe*』を構成する「*Journal d'un Pompier du Jeu de Massacre*」の抜粋. しかしこの作品は，2頁目に，独立した散文詩の表題とも，文中の章題とも解釈できる "Nuit du 12 au 13 novembre" の表示の部分（p. 17～20）が含まれている. Dés 誌はアルランが編集長をしていた前衛誌であるが，この号で廃刊された.「André Malraux」誌2号（1973）に再録. 1975年 Eds. J.-M. Place から翻刻版出版.

アルラン，E.ジャルー，P.ピア，G.ガボリーら作家たち，編集出版関係のフェル，ドワイヤンらであった。

クララはマルローの家族，父フェルナンとその再婚の義母と子供たちロラン，クロード，またマルローの生母などとの交際を深める[11]。

ふたりの経済状態は破産に近く，ゴル夫妻の助けで独映画輸入やピアと協力してエロ本出版を企てたり，また株にも手を出したりしたがいずれもうまくいかず，生活状態は改まらなかった。

文筆活動は次第に拡げて行く。3月，友人ガラニスの個展のためそのカタログに初めての美術批評を発表また7月にはアルランの紹介で初めてN.R.F.誌に書評を寄稿した[12]。

友人ガボリー，「クレオパトラの鼻」(「Les feuilles libres」1921) をマルローに捧げる。春クララとアルランと3人でベルギーに旅行し，オーステンデに住む画家J.アンソールに会う[13]。

7月 *Le comte de Gobineau : L'Abbaye de Typhaines*① (「N.R.F.」106, p.97-8)

7月・P.P.「André Malraux : Lunes en papier」② (「Disque Vert」3, p.78)

8月 *Max Jacob : Art poétique*③ (「N.R.F.」107, p.227-8)

4月・スターリンソ連共産党書記長就任．独ソ通商条約．

6月・仏労働総同盟CGT分裂．

7月・日本共産党創立大会．

10月・ムッソリーニのファシスタ党内閣成立．

12月・ソヴェト社会主義共和国連邦成立．

「ヌーヴェル・リテレール」紙創刊．

バレス『オロント河畔の園』，ロラン『魅せられた魂』(-33)，マルタン・デュ・ガール『チボー家の人々』(-40)．

---

① 書評「ゴビノー伯著『ティフェーヌの僧院』」(N.R.F.刊)．「征服者フランク族に対する被征服者ケルト族の闘いを描いた物語である．…劣っているが堅固な『パルムの僧院』であり，いささかの倦怠を感ぜず，イロニーもいだかずに読みうるロマンティックな稀有なロマンである」．

② 署名のP.P.からパスカル・ピアと推測される．これまでのマルローの評論「マルドロールの歌の生成」やラフォルグの『パリ時評』の校閲，出版の仕事を評価し，『紙の月』について「マルローのこの作品は中世の魔術呪文書のように人を不安にさせる面をもっている」と述べている．

③ 書評「マックス・ジャコブ著『詩法』」(Emile-Paul 刊)．「この詩法は美についての評論の書である．ユニークで斬新な点は，氏がその理念を読者に伝えようとして用いている方法である．それは心理である．……芸術家の心理と芸術感情の心理と呼びたい」．

ジフテリアに罹る。

兵役年令に達し，アルザスのストラスブール軽騎兵連隊に召集を受けたが，不適格者として即日帰郷を命じられる[14]。

ジョイス『ユリシーズ』，エリオット『荒地』，小牧近江訳『クラルテ』

プルースト没.

補註

(1) この出版については Jean de Gourmont の好意論（「Mercure de France」1月と2月号）と，Jean-Aubry, F. Ruchan らの反対論があった。

(2) この年パリに画廊を開いたカーンワイラーが Simon Kra と協力して豪華本を出版するためにパリのブランシュ街につくった書店。マルローはシモンの息子の Lucien と協力して<Coll. Sagittaire>を企画担当した。

(3) 1920年10月20日付 Raymond Radiguet 宛 Max Jacob の手紙によれば，ジャコブがマルローにこの作品の出版を依頼したという。ジャコブはいつも食事をする Café de la Savoyarde に若い芸術家たちを集めていたが，マルローも1919年11月に知已をえて以後，その会に出入していた。(G. Gadory「*Cafés litteraires*」-Les Nouvelles littéraires, No. 104, 1924. 10. 11)。

(4) André Salmon (1881—) パリ生れで，キュビスム運動に参加した詩人，美術評論家；Pascal Pia 文筆家で，当時マルローと共に国立図書館に通い，稀覯本発掘をした。1947年刊の『*Dessins de Goya*』を捧げられている。「冒険家というよりむしろアナキスト」(Clara. II)；René Latouche 1920年自殺。1928年刊のマルローの出世作『*Les Conquérants*』を捧げられている "à la mémoire de mon ami René Latouche".；Georges Gabory，詩人，インドシナ旅行以前の青年マルローの編集出版の仕事の，いわゆる "farfelu" 時代の友。「日曜以外，われわれは毎日会っていた。一番よく会ったのは昼すぎ，クラ書店でのことだった……結婚した友はもう半分しか友ではない。私には妻がいた。私は友を忘れていた。マルローの極東への出立も知らなかった。手紙のやりとりももうなかった」(G. Gabory「*Au temps du farfelu*」—Magazine littéraire, No. 79—80, 1973. 9)；Fernand Fleuret (1884—1945)，詩人，小説家。「Action」の編集長 Fels に紹介される。後にマルローは彼の小説を書評する；D.-H. Kahnweiler (1884—) 独生れのユダヤ系仏人で，ピカソをはじめ現代画家育成に大いに貢献した。Langlois 氏によれば，マルローは秋頃からジャコブにつれられて，カーンワイラー家の日曜午後の茶会によく出席した (W. Langlois「*The Debut of André Malraux editor "Kra 1920—22"*」—「PMLA」1965. 3, p. 111～122)；Juan Gris (1887—1927) スペイン人で立体派画家；Georges Braque (1882—1963)，マルローが "対象模倣の絵画の破壊者" として高く評価し，その死去に際して弔辞を捧げた立体派画家；Marc Chagall (1887—)，ロシヤ生れのユダヤ人画家。1910年パリに来て，ジャコブ，アポリネールらと知り会い立体派の影響をうける。1964年マルロー文化相の依頼でパリのオペラ座の天井画を書く。「マルローは私の最も偉大な友と思う。私は大きな感動をもって彼の書『反回想録』の挿絵を描いた。……マルローは私の友以上の者だった。フランスの，人類の友人であった」(M. Chagall「*Comme un feu*」—N. R. F., No. 295, 1977. 7)；Fernand Léger (1881—1955)，当時立体派に属し，1921年にはマルローの最初の著書に挿絵をした。

(5) A. Germain『*La bourgoisie qui brûle*』1952, Eds. Sun, p. 266 による。

(6) 『紙の月』のプロローグの章の頭辞にクロード・デステルノーの文を引用している。Ainsi qu'on voit une Panteine des bécasses serrer les cours…

(7) 『ラッパを持てる偶像のための書』の自費出版は未確認であるが，内容や表題から次の5点の断片がその草稿と推定される。i）*Journal d'un Pompier du Jeu de Massacre*（「Action」8, 1921. 8)，

ii) *Les Herissons apprivoisés-Journal d'un Pompier du Jeu de Massacre-publié après la mort de l'Auteur avec des Notes par le sieur des Etourneaux*（「Signaux de France et de Belgique」4, 1921. 8), iii) *Lapins pneumatiques dans un jardin français*（「Dés」1, 1922. 4). iv) *Divertissement et Triomphe*（「Accords」3-4, 1924, 10-11). この作品は注に Extrait de : *Ecrit pour une Idole à trompe* と記されていて，最初の Divertissement の章（p. 56～59）は i）の「Action」誌の断片とほとんど同一のものである。Divertissement の後に Triompbe の章（p. 59～61）と続く。v）*Ecrit pour un ours en peluche*（「900」4, 1927, été).「900」誌は，季刊で，Cahiers d'Italie et d'Europe と記され，ローマで刊行されていた（Frohock, Vandegans, Lacouture).

(8) Grasset 刊の初版の文末に "1921—1925" と記されている。

(9) **クララとの出会い**

独のマグデブルグ出身のユダヤ人クララは，第一次大戦前に父を亡くし，毛皮商の叔父のおかげで，休戦後フランスに移住し，1921年当時はパリ16区のシャレ街の家に母と叔父，2人の兄弟と住んでいた。すでに L'Action 誌などに独作家の翻訳などを寄稿していた文学少女だったが，同じく文学青年だったマルローとの共通の友人 Claire Goll は次のようにふたりの出会いを述べている。(『La Poursuite du vent』1976, p. 116～7)。「私はマルローとクララゴールドシュミットの仲介役を果した」。当時＜アクション＞誌の編集をしていた「F. フェルは，毎月きまって，パレ・ロワイヤルのあるレストランで夕食の会を開き，その雑誌の寄稿家たちを集めていた」。6月頃だった。ゴル夫妻はその会にクララをつれて行った。そこにマルローも来ていた。「食事の間，マルローは私たちの傍に席をとった。そしてすぐ私を口説こうとした。様々な文明における愛の様相について素晴しい話をしてくれた。だが，彼の鼻にできた黒いニキビのせいか，彼の魅力も私の心を動かさなかった……私がマルローと踊っている間，クララは私たちの姿を目で追っていた。それでクララがマルローを結婚相手として考えていることが，私にはわかった」。

クララ自身も，その出会いを次の様に語っている（『*Le Bruit de Nos Pas. I—Apprendre à vivre*』Grasset, 1963, p. 268～9.)。「夕食会のテーブルを30人ほどの人が囲んでいた。その中に，ひとりの青年がいた。それが彼アンドレだった……その時は，私は彼のことは何も知らなかった。彼は私の女友達のジャーヌ（ゴル夫人）の傍に坐っていた。彼を見るには少し身をのり出さねばならなかった。皆喋っていた。もっと正確にいえば，彼が話していたという状況だった。丈がとても高く，やせた若者で，目は大きすぎ，その瞳は，とび出したようなその大きな目の玉には小さくおさまってる感じだった。洗われたような緑の紅彩の下に一本の白い線が見えた。……彼がいることを感じはじめたのはほんのいましがたからのことだった。ジャーヌのたてる笑い声のせいだった。……会が終って，ダンスに行った。一行は5人，イヴァン・ゴルとジャーヌ，ルュクサンブルグ生れの人，それにこの "未知のひと" だった」。

クララがマルローにひかれていることに気がついたジャーヌは，ふたりの仲立ちをしようとする。「次の日曜日，私たち夫妻は家でパーティを開いた。グレーズ夫妻，レジェ，シャガール夫妻，そしてマルローが来てくれた。クララはこの機会をとらえて，再びマルローに会った。私の前でも，その心を隠そうともしなかった。——ねえ，わたし，あの人に云ったのよ。持参金が20万フランあるってね……」(p. 117)

こうしてふたりは交際を始め，深めて行った。マルローの好きな美術館めぐりをしたり，ダンス，食事など文学青年らしいつき合いが進んだ。7月頃のことだった。ふたりはいつものようにパリのバルカ街のダンスホールに踊りに行った。夜も更けての帰り路のことだった。与太者にからまれ，マルローはピストルで撃たれ負傷した (Lacouture, p. 39)。こんな文学ボヘミヤン的交際も折りまぜてのことだった。8月，クララは，マルローの美術好きにさそわれ，母には独り旅と偽わって，マルローとふたりでフィレンツェに出かけた。旅のロマネスクの中でふたりは結婚の意志を確め合い，クララはふたりの婚約を母に電報で知らせた。さらに旅をつづけ，シエナで母から反対の返電をうけたがふたりはヴェネチア，スイスとまわり，9月初めパリに帰った (Clara『*Le Bruit de Nos Pas. II—*

Nos vingt ans』1966. p. 15～35)。

帰仏後，ふたりは結婚の準備をする。クララの母への説得，マルローとクララの兄との話合い，そしてようやくマルローの父とクララの母が話合うことになり，結婚が実現した。1921年10月26日，ふたりはパリ16区の役所で結婚式をあげ，当座は，姉さん女房クララの提案で，シャレ街のクララ家の三階に新居をかまえた（正式の離婚は1947年7月9日)。新婚旅行は，ストラスブールをかわきりに，飛行機でプラハにとび，ウイーンに寄り，汽車でドイツに向う。クリスマスの日，クララの生れ故郷の Magdebourg で，祖父をはじめ，親類縁者に会った。帰仏後，クララは，離婚して別居していた義母や，再婚していた義父や異母弟のロラン，クロードなど，マルローの身内に会った。ふたりの生活は，マルローは以前のような編集，出版，執筆の生活，クララも文学生活をつづけた。クララのユダヤ人とのつながりで，カーンワイラー家に出入りし，芸術家などとの交際，美術めぐりなど，ふたりは若い芸術家夫婦らしい世界を広げて行った。

(10) 当時のベルリンの映画館では『カリガリ博士の実験室』を上映していた。ディルクス，レンブラント展などを見たり，ドイツ語が湛能なクララはシュペングラーやカイザーリング，フロイドの本や，カール・アインシュタインの黒人芸術の画集などを買ったりした（Clara『*Le Bruit de Nos Pas. II—Nos vingt ans*』p. 53～54).

(11) マルローの父フェルナンは再婚して十年ほど前からオルレアンに住んでいた。その家にふたりは招待された。当時七歳だったマルローの異母弟ロランはオルレアン駅に出迎えに来て，クララと初めて会った。<眠りの森>と名付けられた家で，一歳下のクロードと新しい義母に会ったが，マルローもこの義母に会うのは初めてだった（Clara, II, p. 90～92).

(12) 当時の編集長 J. Rivière のところへ，アルランの紹介で，散文詩を持込んだが，これは拒否された。しかし書評を寄稿するようにもとめられて，初めてガリマール書店との関係ができた（Clara, II. p. 57)

(13) ブルジュに滞在中，マルロー独りでオーステンデに行き老画家アンソールに会い，出版計画中の本の挿絵を依頼しようとした。その折みたアンソールの絵から影響された描写が後の『*Royaume-Farfelu*』(1928) に認められると云う（Clara, II, p. 67～99)。

(14) Clara. II『*Nos vingt ans*』p. 104～108.